

青年期における親密さ対孤立の危機と自我同一性

教育心理学研究室 伊 藤 研 一

Intimacy vs. Isolation Crisis and Ego Identity in Adolescence

Kenichi Ito

Ego identity status and intimacy status were determined for 44 men and related to each other. The relationship between the intimacy status and self-disclosure was also investigated. Intimate and pre-intimate subjects were higher in self-disclosure than the others.

Identity achievement individuals appeared to have the greatest capacity for engaging in intimate interpersonal relationships. The interpersonal relationships of foreclosure and identity-diffusion subjects were stereotyped and superficial. There were much fewer intimate and pseudo-intimate subjects than in the U.S.. This is perhaps because hetero-sexual relationships were more facilitated in the U.S. than in Japan.

In general, the results were interpreted as supporting the hypothesis that favorable resolution of intimacy-isolation crisis is related to successful resolution of the identity crisis.

I. 問 題

現代において、産業社会化の進展にともない、対人関係の質も変容しつつある。その変容がもたらすものがプラスの産物だけでないことは、青少年の問題行動や離婚等の増加からうかがわれる。

小此木(1980)は、男女関係や友人関係、職場での同僚との関係などが永続性を欠いた一時的なものになり、従って相手に深くかかわって傷つくことをおそれる分裂気質の対人関係が現代の適応様式として一般化してきていると指摘する。またそうした表面的な対人関係の基盤として、変展する社会の中で確固とした自我同一性を獲得することが困難であることを挙げている。

自我同一性とは Erikson (1959) の理論の要の一つであり、Erikson はパーソナリティの発達を、それがさらされる内外の葛藤という観点から、八つの発達段階を設

定した。(表1) そして、それぞれの段階における危機を解決してはじめて次の段階の危機に対処する準備ができると述べている。

ここではⅤとⅦの段階の関連が注目になる。Erikson は「真の親密性—それは同一性に付随し、しかもそれと融合するものである—が可能になるのは同一性が申し分ない形で形成途上にある場合に限られる。」「自分の同一性に確信をもてない青年は親密な対人関係からしりごみをする」としている。すなわち「真の親密性」の前提が「同一性」である。しかし Erikson のいう「親密性」は、単にお互いに相手を尊重するといった静的な状態ではなく、力動的なものを意味する。それを浮き彫りにするために「真の親密性」でないものを箇条書きにしてみよう。

①真の融合や真の自己放棄を伴わない「性的に乱れた」親密な行為に身をまかす。

②きわめてステレオタイプ化した対人関係で満足して

表1 Erikson の発達段階

I 乳児期	II 早期児童期	III 遊戯期	IV 学齢期	V 青年期	VI 初期成人期	VII 成人期	VIII 成熟期
信 頼 対 不 信	自 律 性 対 恥, 疑 惑	積 極 性 対 罪 惡 感	勤 勉 性 対 劣 等 感	同 一 性 対 同一性拡散	親 密 さ 対 孤 立	生 殖 性 対 自 己 陶 醉	統 合 性 対 絶 望

しまい、また深い孤立感を味わう。

③自己の本質にとって危険な存在と思われる勢力や人々を否認し、孤立させ、必要ならば破壊してしまおうとする。

④自己の親密性や連帯性の領域を要塞化し見知っているものとそうでないものとの間の「小差の過大評価」という狂信的な態度で外部の人間すべてを眺める。

⑤自分の「ものの考え方」に自信がもてず他者に対して分別ある適確な拒否ができず拒否の弱さ、あるいは過剰な拒否という形の表現になる。

①～⑤を通して共通に見られるのは脆弱な自己の同一性を守るために「真の親密性」「融合」を怖れる態度である。逆にいうと「真の親密性」の本質は、それまで営々として築きあげてきた同一性を放棄し、他者に融合させようということになる。そうしても自分が無にならない、むしろ豊かになるという柔軟で確固とした同一性の感覚が求められる。

本研究では、Ⅴ段階とⅥ段階の関連を操作的方法によって明らかにすることを目的とする。

自我同一性については Marcia (1966) の自我同一性地位、親密性については Orlofsky ら(1973) の親密性地位の概念を採りあげる。

自我同一性地位は「危機」と傾倒」という二つの基準によって分類される。(表2)

「危機」とはその個人が意味のある、いくつかの可能性について迷い、決定しようと苦闘、あるいは探索した期間のことである。「傾倒」は、自分の信念を明確に表現したり、それに基づいて行動することを指す。これらの二基準を青年にとって重要な意味があると考えられる職

表2 自我同一性地位

地位 基準	地位				
	達 成	モラトリアム	早期完了	拡 散	
危 機	あ っ た	際 中	な い	あ っ た	
傾 倒	し て い る	あ る が あ い ま い	し て い る	し て い な い	

業とイデオロギー(実際は政治と宗教)の領域について評定することで自我同一性地位が決まる。この概念は①基準自体に力動的な意味があり、自我同一性の形成過程を示唆している。②四つの地位があり、Erikson の両極より分化した把握が可能である。③領域が具体的に示ばられていて明確である。などの点で評価できる。

先行研究を見ると、心理的安定、成熟などの点から、「達成、モラトリアム」対「早期完了、拡散」という軸が得られ、Erikson のいう「適切な同一性の感覚」への道すじは、「モラトリアム→達成」であることをうかがわせる。

親密性地位は、三つの基準によって分類される。それらは①親しい友人関係があるかないか、②持続的な異性愛関係があるかないか、③関係の深さである。(表3)

①、②の基準は文字通りの意味であるが、③については以下の諸点を考慮し、総合的に評定することが求められる。

- 1) 親しさと開放性：相手と開放的な姿勢を維持している。相手を知るように行動し、また自分を相手に知らせるようにする。相手の深い部分や感情にふれ、また自分の深い感情をも開放する。その結果として親しさや一体感をわかち合う。相手と殆どどんなことでもわかち合う気があり、また望む。個人的な問題や心配事、両者間の葛藤も共有する。親しさと開放性の必須条件として自己覚知、内部にふれること、相互的信頼が、あげられる。

- 2) 配慮、愛情：相手の生活、成長への真の関心。
- 3) 責任：相手の(表現された、あるいはされていない)要求に応える能力、またそうする気があること。相手を手助けする相手のために犠牲を払うといったことも含まれる。別々の個人として相手を尊重する。

(支配的、利己的行動と対照的)

- 4) 関与：関係が持続的であること。一緒にいることに対するお互いの決断。また二人の関係についての問題にかかわり、それについて話し合う。(問題が存在しないかのようにふるまう、あるいは自分の中だけにとどめておくのとは対照的)

表3 親密性地位

基 準	地 位				
	親 密	前 親 密	擬 似 親 密	形 式 的 関 係	孤 立
親しい友人関係	あ る	あ る	あ る	あ る	な い
持続的な異性愛関係	あ る	な い	あ る	な い	な い
関係の深さ	深 い	深 い	表 面 的	表 面 的	表 面 的

5) 相互性：一方的な開放性，親しさ，愛は親密性を構成しない。感情，かかわりの感覚は相互的でなければならない。

6) 性器期的成熟：異性の相手への性的な感情，魅力を感じている。相互に満足のいく性的関係。

Orlofsky ら (1973) によって自我同一性地位で達成 (Achievement 以下 A と略す) 群，モラトリアム (Moratorium 以下 M) 群に，親密 (Intimate 以下 Int) 群，前親密 (Pre Intimate 以下 Pre) 群が多く，早期完了 (Foreclosure 以下 F) 群，拡散 (Diffusion 以下 D) 群に擬似親密 (Pseudo Intimate 以下 Ps) 群，形式的関係 (Stereotyped 以下 St) 群，孤立 (Isolate 以下 Iso) 群が多いことなどが確かめられている。

したがって本論文の目的は具体的には，前述のようにこの追試と，伊藤(1982)によって一応確かめられた日本版親密性地位の妥当性を別な角度から検証することである。特に Orlofsky ら(1973)において十分，分化しなかった Int と Pre の差，Ps と St の差を見出す努力をする。

この差について Orlofsky らは，質問紙法によったために見出せなかったとしている。すなわち質問紙法では態度，価値観を測定するのであるが，Int と Pre および St と Ps は，態度，価値観において共通しているため差があらわれない，その差を見出すには行動評定尺度のような測度が必要だと述べている。

しかし筆者は行動上の差を反映するような質問紙であれば十分差があらわれると考え，自己開放性質問紙 (飯長1977) をこの目的のために使うことにした。これは Jourard (1977) による「自己についての個人的情報をどれだけ他者に与えるか」についての尺度を参考にした日本版である。質問紙は話しやすい話題 (L と略す) 20 項目，話しにくい話題 (MH) 20 項目の計 40 項目で構成されており，特定の人物 (Target Person) に対して今までの程度それぞれの話題について話したかを得点化¹⁾して記入するものである。飯長(1977)は，エンカウンターグループでの実際の開放性と，Target Person を「男女の親しい友人」「グループ」とした時の開放性得点との間に有意相関を得ている。そこで本研究では，Target Person を「男女の親しい友人」として得点化することが親密性地位の定義から有効であろう。親密性地位と自己開放性得点との関連についての仮説は次のようである。

- ① Int, Pre は Ps, St, Iso より対男性，対女性の開放性得点，特に MH での得点が高い。
- ② Int は Pre よりも対女性の開放性得点が高い。
- ③ Ps は St よりも対女性の開放性得点が高い。

④ Iso は他群に比べて開放性得点は低い。

また，自我同一性地位と親密性地位との関係については Orlofsky ら(1973)から以下のものである。

- ① 自我同一性地位の A, M 群は Int, Pre 群が多い
- ② F, D 群は Ps, St, Iso 群が多い。
- ③ A 群に Int 群が多く，M 群に Pre 群が多い。

II. 方法

A. 被験者

大学3，4年生男子37名，大学院生男子7名の計44名である。(理系18名，文系26名) 被験者には「主に進路選択と友だちづき合いについて話してほしい」と依頼した。

B. 手続き

1. 自我同一性地位面接

無藤(1975)の日本版の研究に続く渡辺(1978)の面接内容，および評定マニュアルによって施行した。ただし，被験者の負担を軽減するため政治の領域を除き，職業，価値観²⁾の二領域とした。この各領域について半ば構造化された面接³⁾をおこない，地位を評定し，さらに全体としての同一性地位を評定する。面接者が主評定者となり，面接内容を録音したものの逐語録を別の評定者2名が同様に評定し一致率⁴⁾を求めた。面接者は3名で，したがって，誰が主評定者であるかで多少ばらつきはあるが80% (p<.05)~92.3% (p<.001)であった。

2. 親密性地位面接

面接項目，評定基準は伊藤(1982)による。任意抽出した20名の面接の逐語記録をもとに1と同様に一致を求めると95% (p<.001)である。(面接者は1名)

3. 質問紙調査

自己開放性質問紙に，原則として面接直後に，時間のとれない被験者には郵送で回答を得た。

III. 結果

A. 親密性地位と自己開放性

次の比較において有意な差が見られた。

1. 対男性の自己開放性

MH 得点について

- a. Int+Pre>Ps+St (p<.01)
Int+Pre>Ps+St+Iso (p<.01)
- b. L 得点について
有意差は見られなかった。

表 3 親密性地位と自己開放性 (対男性)

	n	MH得点 平 均	MH得点 標準偏差	L 得 点 平 均	L 得 点 標準偏差
Int	2	27.5	16.3	31.0	12.7
Pre	10	25.4	6.4	29.1	5.4
Ps	6	17.3	11.3	27.3	7.0
St	23	17.6	8.6	26.2	7.0
Iso	3	18.6	8.6	28.3	8.5

表 4 親密性地位と自己開放性 (対女性)

	n	MH得点 平 均	MH得点 標準偏差	L 得 点 平 均	L 得 点 標準偏差
Int	2	30.0	9.9	33.0	7.1
Pre	10	22.0	8.3	28.5	6.0
Ps	6	18.3	11.9	31.0	7.8
St	注1 22	10.0	7.0	20.1	7.8
Iso	3	12.0	7.0	23.0	5.3

注1 1名回答もれ

2. 対女性の自己開放性

a. MH 得点について

Int+Pre>Ps+St (p<.001)

Int+Pre>Ps+St+Iso (p<.001)

Ps>St (p<.05)

Int の平均は Pre より高いが有意差には致っていない。

b. L 得点について

Int+Pre>Ps+St (p<.05)

Int+Pre>Ps+St+Iso (p<.05)

Ps>St (p<.01)

Int と Pre の比較では有意差がない。

以上、Int と Pre の差があらわれなかったこと、Iso の開放性が低くなかったことをのぞくと、予想通りの結果である。また対女性の自己開放性得点の方が男性のそれよりそれぞれの比較での差がきわだっている。一般に MH 得点の方で明確であるが Ps 対 St の対女性得点では L 得点の方がはっきりと差が出ていることがわかる。

B. 自我同一性地位と親密性地位

検定のために自我同一性地位の方を A+M と F+D, 親密性地位の方を Int+Pre と Ps+St+Iso と分けると、A+M 群に Int+Pre が、F+D 群に Ps+St+Iso がそれぞれ多い。(p<.001) また A に Pre が多く、F, D に St が多いことが読みとれる。さらに D には Pre または Int が一人もいない。

IV. 考 察

A. 親密性地位と自己開放性

結果は Int, Pre 群の他群に比しての開放性の高さを示し、親密性地位の構成概念からして妥当といえる。

また対女性の開放性が親密性地位間の差をより明確にあらわすということは、この親密性地位が異性との関係のあり方をより強く反映していると考えられ、Erikson のいう同一性獲得の次の段階としての「親密さ」をまさに代表すると思われる。いいかえれば、自分というものを確立した上で、異質な存在(それは自分の内にもあるのであるが)をどの程度とり入れるかということにつながる。

MH得点、すなわち話しにくい話題での開放性が Int, Pre 群と他群をはっきりと分けることは、親密性地位で問題にされている開放性が深い部分のそれであることを

表 5 自我同一性地位と親密性地位

親密性 自我同一性	Int	Pre	Ps	St	Iso	計
A	0	8 (80) ^{注1}	1 (10)	1 (10)	0	10
M	0	1 (50)	0	0	1 (50)	2
F	2 (8.7)	1 (4.3)	4 (17.4)	16 (69.6)	0	23
D	0	0	1 (11.1)	6 (66.7)	2 (22.2)	9
計	2 (4.5)	10 (22.7)	6 (13.6)	23 (52.3)	3 (6.8)	44

注1 ()内は行和に対する%

裏づける。

Ps と St の対女性の開放性についての仮説はたしかめられたが、特に MH 得点より L 得点で差が大きくあらわれたことが注目される。このことは Pt と St が違うといっても表面的な部分にその違いが強くあらわれていることを示す。

Int と Pre の差については、Int の被験者が少なすぎたため意味のあることは言えないが、Int が対女性の開放性で Pre より高いことは傾向として読みとれる。

Iso と Ps, St は差がない。このことは、面接中に面接者が感じる、他群に比しての強い防衛的態度、拒否されているような感覚からすると意外である。

しかし、この質問紙がたずねているのが、どの位「話したか」であることからすると、「隠したい」、あるいは「ごまかしたい」といった、いわば開放性の負の方向については測っていないことに帰因するようと思われる。

B. 自我同一性地位と親密性地位

自我同一性と親密性との関連についてはほぼ仮説どおりである。

ただ、A に Int がなく Pre が多いことは仮説とくい違っている。この事は A 群でもまだ異性との真の親密さを獲得する程の成熟をなしてあげないかとも受け取れる。しかし、①Erikson は、ある段階の危機を解決してはじめて次の段階の危機に対処する「準備」ができるとしている、②Ps より St 群の方が多し、ことを考えあわせると、「異性との持続的愛情関係」を形成するといふところに社会文化的影響が働いていると思われる。この点については伊藤 (1982) でも触れたが、異性との交際の有無が適応のサインとなるなど異性愛関係に促進的条件のそろっている米国とそうでない日本とでは、現実に、そうした異性愛関係を持つかどうかに大きな差があるので当然であろう。すなわち日本では心理的準備はできているが Int にならず Pre にとどまっている青年が多いと思われる。

このような環境的影響を別の角度から示していると思われるのが F 群に 2 名の Int がいることである。これらの 2 名はともに対人関係を重視する価値観を共有する下位集団 (サークル, ボランティア集団) に属していて、その集団には女性が多い。そうした条件の影響を強く受けているのがこの 2 名と考えられる。

ちがった見方をすると、この 2 名は職業、価値観という領域では F であるが、もし対人関係という領域があったとすれば A であるかもしれない。

さらに敷衍すると、今まで自我同一性地位、親密性地

位とわけて考えてきたが、これは男子青年の標準的な発達の道すじを考えるための便宜的な概念と考えられないだろうか。Tabachnick (1967) は同一性を自己の欲求の実現と社会の要求とのバランス関係ととらえている。その考え方からすれば、その個人にとっての心理社会的環境によって、意味のある領域が職業になる場合もあるし、政治、宗教、価値観、対人関係になることもある。女子青年の研究において、男子青年における程、親密性の前提条件としての自我同一性の意味がはっきりしない (Hodgson, 1978) のも、女子青年に重要な領域を同定したいことが一因と思われる。

V. 本研究の限界と問題

本研究の基盤は Erikson の発達段階という欧米的な個人の確立を前提にした理論である。その過程では常に個人にとって異質なものと、矛盾するものとの出会いがあり、それらを切り捨てるか、統合するかの選択がある。

一方、日本においては河合 (1976) のいうように包みこみ、平衡をとろうとする倫理が根底にある。

したがって本研究では後者の要素を見落している可能性を無視しえない。

しかし少なくとも現代の男子青年の場合に自我同一性、親密性といった概念で説明できる部分が、かなりあることを明らかにしたことは意味があるだろう。

注

- 1) 「くわしく話した」を 2 点、「およそ話した」を 1 点、「話さない」を 0 点、「ウソをついた」を × (集計するときは 0 点) と記入する。
- 2) 日本版では、「宗教」の領域の代わりとなっている。
- 3) 質問項目は決まっているのだが、類型化できるだけの十分な情報を得たと面接者自身が確信できるまで、ある程度、逸脱して質問することが許されている。
- 4) 主評定者と他の少なくとも 1 名の評定者と評定が一致した場合を一致数として数え、一致数が全数に占める割合のことである。

文 献

- Erikson, E.H. 1959 Identity and the life cycle; selected papers, Psychological Issues, I (1)
 小此木啓吾 (訳) 1973 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- Hodgson, J.W. 1978 Sex differences in Identity and Intimacy Development in College Youth, J. of Youth & Adolescence, 8 (1) 37-50.
- 飯長喜一郎 1977 グループ合宿における自己開放性, 東京大学教育学部紀要, 17, 77-84.
- 伊藤研一 1982 「親密さ対孤立」の危機解決様式に関する実証的研究, 東京大学教育学部教育相談室紀要, 5, 123-128.

- Jourard, S.M. 1971 *Self-disclosure*, Wiley-Interscience.
- 河合隼雄 1976 *母性社会日本の病理* 中央公論社
- Marcia, J.E. 1976 *Development and Validation of ego identity status*, *J. of Personality and Social Psychology*, 3 (5), 551-558.
- 無藤清子 1975 *大学生の自我同一性* 東京大学教育学部修士論文
- 小此木啓吾 1980 *シゾイド人間* 朝日出版社
- Orlofsky, J.L., Marcia, J.E. and Lesser, I.M. 1973 *Ego Identity Status and the Intimacy vs. Isolation Crisis of Young Adulthood*, *J. of Personality Soc. Psychology* 27 (2) 211-219.
- Tabachnick, N. 1967 *Self-Realization and Social Definition—Two aspects of Identity Formation*, *Int. J. of Psycho-Analysis*, 48, 68-75.
- 渡辺考憲 1978 *大学4年生の自我同一性——心理社会的自我同一性と自己意識的自我同一性をめぐって——*東京大学教育学部修士論文